21

みんぱく学術フォーラム

新世紀に生きる

平成13年2月9日(金)

大阪国際会議場特別会議場

主　催　文部科学省大学共同利用機関
国立民族学博物館
産経新聞社/関西2100委員会

協　賛　大阪国際会議場

プログラム

司会進行
庄司博史教授 （民族社会研究部長）

13:35～13:55　挨拶
講演「21世紀と民族学」
石毛直道館長

13:55～14:40　講　演Ⅰ
「20世紀とは何だったか」
端　信行教授（博物館民族学研究部）

14:40～14:50　休　憩

14:50～15:35　講　演Ⅱ
「神の復讐－21世紀南アジアの民族紛争」
杉本良男教授（民族文化研究部）

15:35～16:20　講　演Ⅲ
「共同体と社縁文化の未来」
中牧弘允教授（先端民族学研究部）

16:20～16:30　質問タイム

21世紀と民族学

石毛 直道

国立民族学博物館（みんぱく）では、世界の諸民族の文化や生活についての展示をおこない、異なる文化についての理解を深めていただくことにつとめています。

いっぽう、みんぱくは日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての役割をになっています。みんぱくの研究者たちは、海外での現地調査に従事したり、国内外の研究者たちと共同研究をおこなうなど、民族学の最先端の研究活動に従事して、おおくの成果をあげています。

民族学というと、世界のへき地に住む少数民族の文化や社会を調べる、浮き世ばなれした学問だと思われがちです。しかし、現代の民族学は都市問題、環境問題、民族問題など、21世紀の世界が直面するさまざまな課題にたいする基礎的な研究もおこなっているのです。みんぱくは、そのような現代的な民族学研究に積極的に取り組んでおります。

ながい人類の歴史のなかで、20世紀ほど世界の諸民族と、それをとりまく環境が大きな変化をとげた時代はありません。たとえば、前世紀には自動車、航空機、放送、コンピュータなどの交通・通信手段が飛躍的に発達しました。そのことが人々のくらしや社会のありかたに大きな影響をあたえ、伝統的な社会や文化が急激に変化しました。

現代の世界に孤立した少数民族というものはありません。すべての民族が、人類全体と運命を共にする「同時代人」なのです。世界の民族の現状について知ることは、自分たちの民族の将来について考えることにつながるのです。

みんぱくでは、「20世紀における諸民族文化の伝統と変容」という特別研究を10年間継続してきました。この激動の時代に、世界の民族文化が、どのように伝統をたもち、どのように変化したのかを総合的に比較研究しようというプロジェクトです。そのことによって、人類にとっての20世紀の意味を考えてみようと試みたのです。

この特別研究が終了したのを記念して、研究成果の一部を、わかりやすく皆さんに紹介するために、講演会を開催することにいたしました。あたらしい世紀のはじめにあたって、前世紀をふりかえり、これからの時代のありかたについて、聴衆の皆さんが考える契機となれば幸いです。

20世紀とは何であったか

端　信行

国立民族学博物館では、1991年度（平成3）より10年計画の特別研究「20世紀における諸民族文化の伝統と変容」（「20世紀研究」と略称）を進めてきました。この特別研究は、人類学・民族学の立場から、20世紀における世界の諸民族の文化的伝統やその変化を比較研究し、そこから20世紀がわたしたち人類にとってどんな意味を持っていたのかを明らかにすることを目的に、20世紀の終わるちょうど2000年度に終了するように計画・立案されました。昨年秋に、研究の中心的な役割を占めるシンポジウムを終わったところです。今回の学術フォーラムでは、この「20世紀研究」10年の成果を紹介いたします。

まず10年間の研究の概要を示しましょう。表1.にその概要をまとめてみました。1年目にはプレシンポジウムを行い、10年間の研究の進め方、20世紀を見る視点などを検討し、翌年度からは毎年テーマを決め、そのテーマのもとに研究を進め、シンポジウムを行ってきました。各年のテーマ（研究責任者）とそこで取り上げられた代表的なキイワードは表の通りです。

これらのキイワードを子細に見ると、20世紀の100年がわたしたち人類の生活や社会そして文化にもたらした意味が見えてくるのではないでしょうか。参考に、表2にはこの100年の大きな出来事を世界と日本とで並べてみました。大きな潮流のひとつはやはり科学技術の発達とその普及でしょう。発達した交通機関や様々な機器類、都市的居住など、いまや人類の生活用具のなかでも工業製品がほとんどを占めるようになりました。これらの変化はまさしく20世紀の変化なのです。またいま一つの大きな潮流は、国際関係を中心とした世界の秩序の変化です。19世紀末に西欧に生まれた国民を主権とする国家（国民国家）が20世紀の世界をリードする原理となり、国家を単位とする国際関係にもとづく秩序が模索されてきました。こうした国際関係の秩序の変化に民族は大きく揺れ動かされてきたのです。

この20世紀を貫く大きなふたつの潮流は、互いに影響し合って近年のグローバル化を促しています。この傾向は今後もより強まると考えられ、それとともにわたしたち人類の文化がどのように進もうとしているのかが、これからの大きな課題と言えるでしょう。

表1.　特別研究10年のテーマとキイワード

年度	テーマ	研究責任者	キイワード
1991	『二〇世紀とは何か』	端　　信行	二〇世紀を見る視点
1992	『二〇世紀の音』	櫻井　哲男	機器の発達、 コピー文化
1993	『映像文化』	大森　康宏	機器の発達、 ヴィジュアル文化
1994	『観光の二〇世紀』	石森　秀三	移動・流動化、 文化の商品化
1995	『文化の生産』	田村　克己	国民文化と民族文化、 文化と政治
1996	『共同体の二〇世紀』	中牧　弘允	共同体の衰退、 個人化傾向
1997	『ことばの二〇世紀』	庄司　博史	多言語化、 多言語コミュニティ
1998	『宗教と文明化の二〇世紀』	杉本　良男	拡散する新宗教、 国家と宗教
1999	『日用品の二〇世紀』	近藤　雅樹	工業製品の普及、 薄れる一体化
2000	『二〇世紀が創りだした“民族”』	端　　信行	人種と民族、国家と 民族、文化の変質、 グローバル化

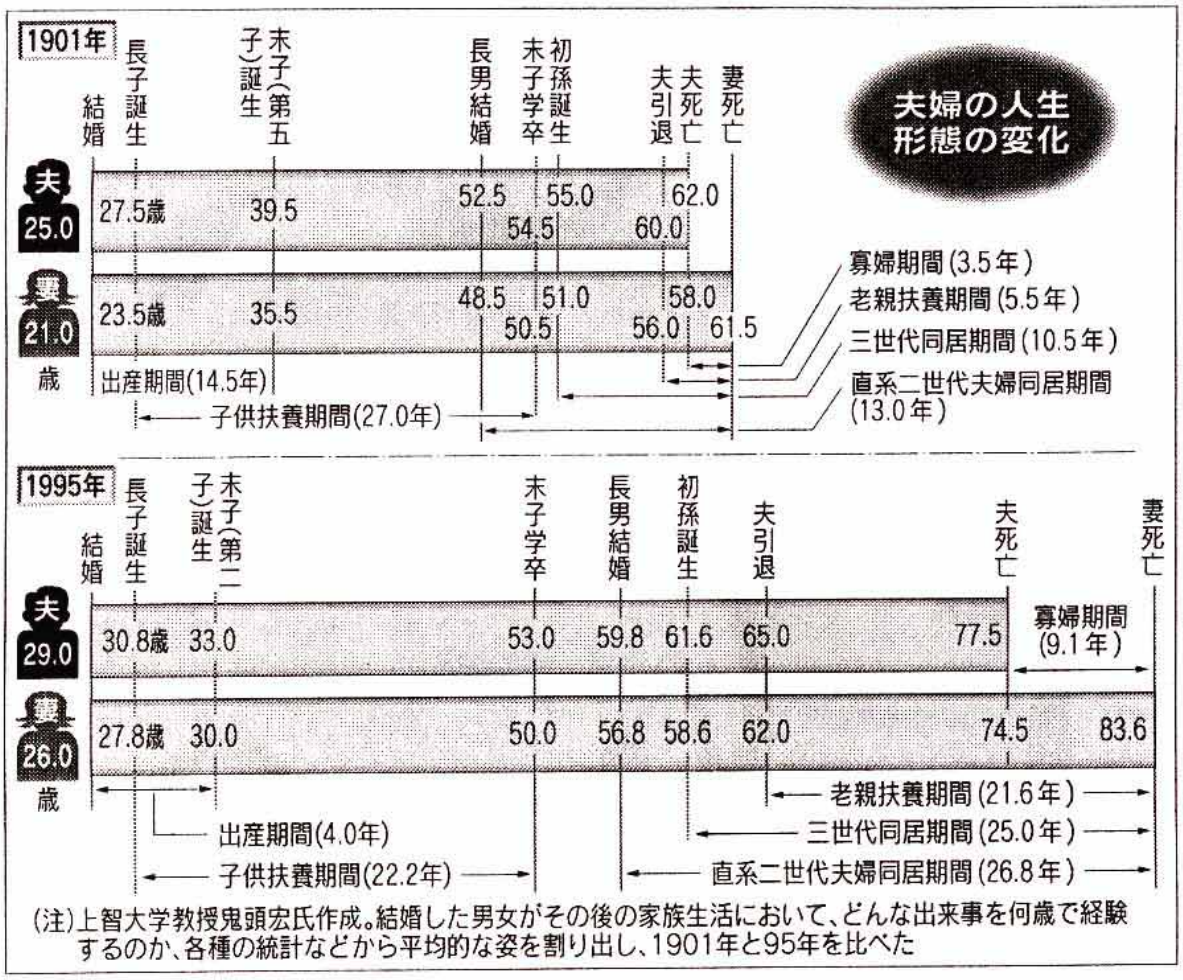
表2.　20世紀における世界と日本のおもな出来事

年度	世　　界	年度	日　　本
1903	ライト兄弟、初飛行	1902	日英同盟、台湾島民を日本国籍に編入
		1904	日露戦争（1905年まで）
		1907	初の国産ガソリン車「タクリー号」、主な鉄道が国有化
1908	T型フォード登場	1908	初のブラジル移民
		1910	韓国併合
		1912	ストックホルム五輪に初参加、明治天皇崩御、元号は大正に
1914	第1次世界大戦（1918年まで）	1914	第1次世界大戦（1918年まで）
1920	国際連盟成立（発足時42カ国）		
1922	ソヴィエト連邦成立	1923	関東大震災
		1925	東京放送局がラジオ本放送
		1926	大正天皇崩御、元号は昭和に
		1927	上野一浅草間に初の地下鉄開通
		1933	国際連盟脱退
		1937	第一回文化勲章
1939	第2次世界大戦（1945年まで）	1940	日独伊3国軍事同盟
1945	国際連合成立（51カ国調印）	1941	第2次世界大戦（太平洋戦争1945年まで）
1948	イスラエル建国、第1次中東戦争		
1950	朝鮮戦争（1953年まで）		
		1953	NHKテレビ本放送
		1956	経済白書「もはや戦後ではない」
1960	アフリカの年（アフリカ17ヵ国独立）	1960	カラーテレビ本放送、国民所得倍増計画
1961	独ベルリンに「ベルリンの壁」		
		1964	東海道新幹線、東京五輪
		1965	名神高速道路が全線開通
		1967	公害対策基本法
		1970	大阪万博
1975	ベトナム戦争終結	1975	沖縄海洋博
		1978	新東京国際空港（成田）開港
1979	イラン革命はじまる	1983	男女の平均寿命が世界一に
		1987	JR誕生
1989	ベルリンの壁崩壊	1989	昭和天皇崩御、元号は平成に
1990	東西ドイツ統一		
1991	南アフリカ、アパルトヘイト体制終結		
	ソヴィエト連邦消滅		
1992	旧ユーゴ、ボスニアで内戦勃発		
	地球環境サミット	1994	関西国際空港開港
2000	朝鮮半島で南北首脳会談	1995	阪神・淡路大震災

表．3

民族文化の変容と二〇世紀現象
[人間と感性]をめぐって 「モノと人間」・・・・・・ 工業製品の普及、薄れるモノとの一体化 「コピー文化」・・・・・・ 音や映像の複製・再生、一回性の消滅 「ヴィジュアル化」・・・・ 漫画、テレビ、マルチメディア、解放性
[社会と個人] をめぐって 「人口の流動化」・・・・・ 都市化、難民から観光まで、文化の経済化 「多言語化」・・・・・・・ 多様なコミュニケーション、多文化共生 「個人化の流れ」・・・・・ 個人空間、個人所有、 「共同体の衰退」・・・・・ 共同性の利点の希薄化、自由度の拡大
[政治と文化]をめぐって 「国家の登場」・・・・・・ 近代国家（国民主権国家）、国際社会、植民地支配、 「文化の政治化」・・・・・ 国民文化の光と陰、文化の質的変容、 「宗教と文明化」・・・・・拡散する新宗教、問い直される国家と宗教

図1.　20世紀における日本人の人生の変化



(注)上智大学教授鬼頭宏氏作成。結婚した男女がその後の家族生活において、どんな出来事を何歳で経験するのか、各種の統計などから平均的な姿を割り出し、1901年と95年を比べた

(日経新聞 2000年12月31日付による)

神の復讐－21世紀南アジアの民族紛争

杉本　良男

南アジア世界では、1980年代から、宗教を指標とした民族紛争が深刻化し、国家の屋台骨をゆるがすまでに至っている。インドにおいては、1947年独立以来の懸案ともいえるヒンドゥー・ムスリムの対立にくわえて、90年代後半のヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚とともに、ヒンドゥー教徒によるキリスト教徒、仏教徒への襲撃事件などが起るようになってきた。スリランカにおいても、1983年以来、シンハラ仏教徒とタミル・ヒンドゥー教徒の対立がつづき、観光立国をめざしたスリランカ政府のもくろみを暴力的に打ち砕いてしまった。

南アジア世界に限らず、宗教と民族をめぐる紛争は、世界各地で起っている。とりわけ、旧ソ連の崩壊後の旧東欧諸国などでは、社会主義体制のもとで抑えられていた宗教問題が浮上し、いわゆる再聖化にともなうさまざまな問題が起ってきている。また、世界の対立軸が、米ソ間のイデオロギー対立から、アメリカ・ムスリム間の宗教・文明の対立・衝突へと移り、宗教のもつ政治的な側面がにわかに注目されるようになってきた。

ジル・ケペルは、このような20世紀末の宗教・政治状況を「神の復讐」（邦題「宗教の復讐」）とよび、また、ハンチントンによる「文明の衝突」論もまた、20世紀末から21世紀にかけての宗教状況を反映した議論である。そして、南アジア世界で起っている宗教・民族紛争は、ローカルな政治社会状況を背景としているだけでなく、当然世界の大きな動きとも無縁ではない。

インドにおけるヒンドゥー・ムスリムの対立は、1992年の聖地アヨーディヤのモスク破壊事件でその頂点を迎えた。その後、インド各地でヒンドゥー・ムスリムの対立抗争事件が起ったが、その背景には、独立後ながらく旧ソ連・ロシアに近い社会主義体制を維持してきたインドと、中東・西アジア世界におけるアメリカの橋頭堡の役割を果たしてきたパキスタンとの政治的な対立関係があった。

それとともに、東西冷戦構造の崩壊ののち、インド経済は開放化に向かい、その流れのなかでヒンドゥー・ナショナリスト政党の擡頭もみられた。海外在住インド人（NRI）の増加とその影響力の拡大は、インド社会をグローバル化の渦にまきこみ、そこから逆にナショナリスト的心情が強化される結果を招いている。ヒンドゥー・ナショナリズムは、カースト間対立や経済格差などの要因を巻き込みながら、それを宗教間対立の方向にひきずる役割を果たしているのである。

また、スリランカにおける紛争に関しては、83年当時、旧ソ連や東欧諸国の関与がまことしやかにうわさされていた。その後の、スリランカ政府軍とタミル・ゲリラとの内戦状態の中では、西欧諸国などによる武器供与やキャンプでのトレーニングが行われたことがうわさされている。これらの「うわさ」は、その真偽はともかく、スリランカの紛争が一国内で片づく問題ではなく、世界の構造を背景にしていること、とりわけ、軍需経済を必要悪とする現在の世界経済体制の前衛におかれていることをしめしている。

その意味で、南アジアにおける宗教・民族紛争の21世紀における展開を、ひとごととしてではなく注目する必要がある。

序．宗教の時代と新たな冷戦

●カナダ郵政の当惑
Ｐスタンプとプラバカラン議長（資料①）

●「宗教の世紀」？
「宗教の世紀」の幕開き」『中央公論』2001年1月号
「宗教戦争としての現代」『大航海』1999年8月号

●「神（宗教）の復讐」（ジル・ケペル）・「文明の衝突」（ハンチントン）
中東ーイラン･イラク戦争、エジプト、イスラエル・パレスティナ・ヨルダン
旧東欧ー旧ユーゴ、旧ソ連の中央アジア、モンゴルの宗教復活
インドネシアのティモール問題、タイ･ビルマの少数民族問題
→日本でも、オウム真理教、法の華、統一教会... などの問題
イスラーム教文明対キリスト教文明、新たな冷戦構造

●南アジアの宗教・民族紛争
多民族・多宗教世界における宗教・ナショナリズム（資料②）
（中野・飯田・山中（編）『宗教とナショナリズム』世界思想社）
ヒンドゥー･ナショナリズムーアヨーディヤ問題（インド）
ヒンドゥーームスリム・コミュナル対立の構図（宗教）
シンハラ仏教ナショナリズムータミル分離主義（スリランカーインド）
シンハラ仏教ータミル・ヒンドゥー対立の構図（宗教）

1.アヨーディヤ問題

●アヨーディヤ問題の発端
「バーブルのモスク」・「ラーマの誕生地」→1992年12月6日モスクの破壊事件
ヒジュラ暦935年（西暦1528年）、聖地アヨーディヤにつくられたモスク
紛争の発端ーヒンドゥー教ヴィシュヌ派の行者がモスクを占拠（1853年）
ムスリムの反撃（1855）、1857叛乱で行者が英軍をかくまう

●アヨーディヤ問題の展開
牝牛保護運動ー牛食いのイギリス人、牛屠殺のムスリム←ヒンドゥーの反撥
牛の犠牲祭ームスリムの牛供犠に対してヒンドゥーが攻撃←衝突事件（1911～）
国民会議派対ムスリム連盟ー1930年代に対立が激化（ガーンディーとジンナー）
印パ分離独立ーパーキースターン（1947.8.14）、インド（1947.8.15）
→ラーマ神像の自生（ｽﾜﾔｰﾝﾌﾞ）ー1949年12月22日深夜、モスクの内陣にラーマ出現

●アヨーディヤ問題の現在
世界ヒンドゥー会議ー民族義勇団ーインド人民党
世界ヒンドゥー会議（VHP,1964）ー1984年「ラーマ誕生地解放運動」を始める
←民族義勇団（RSS,1925）ーヒンドゥー教との鍛錬と団結←ガンディーに失望
ラート・ヤートラーラーマ寺院への行進、「錠をあけろ」キャンペーン
インド人民党（BJP,1980）←ジャン・サング（1951）ーＲＳＳと深い関係

●モスクの破壊
ラート・ヤートラー1989年～1990年、全インド規模の行進→政治問題
インド人民党ー連立政権が行進を妨害→政権離脱→連立政権崩壊
政治的混乱ー1991年新政権誕生（小政党と会議派）→崩壊→選挙→ラジーヴ暗殺
「過激派」によるモスク破壊?ー1992年12月6日→ヒンドゥー・ムスリム対立の激化
紛争は全国に拡大→南インドの反イスラーム運動

2.スリランカの1983年暴動

●暴動の勃発

７月23日、北部タミル人の中心都市ジャフナでシンハラ兵士13人殺害
24日夜から25日にかけてコロンボで組織的なタミル人（商店）襲撃
25日、コロンボ市監獄を襲撃、タミル人囚人35名殺害
25日夕方スリランカ全土に外出禁止令
25―28日、タミル人17万人（コロンボで10万人）難民化、4000人殺害?

●紛争の拡大と収束

コロンボでの商店焼き打ち→スリランカ全土でのタミル人襲撃
スリランカ中央高地部の都市、紅茶プランテーション地域などへ飛び火
７月30日、極左政党の非合法化（新平等社会党ＮＳＳＰ、ＪＶＰ、共産党ＣＰ）
８月５日、第６次憲法改正、分離主義を標榜することを禁止、宣誓を要請
９月15日、外出禁止令解除、騒動はいちおう鎮静化
組織化された襲撃
コロンボ郊外のボレッラ地区からタミル人経営の商店を狙い撃ち
マシュー工業相・全国サービス組合（JSS）の暗躍
シンハラ急進派ナショナリスト
マシュー工業相→プレマダーサ首相（のち大統領）のライン

3.インド・スリランカ関係の中での紛争

●タミル勢力の百花繚乱百家斉放

タミル統一解放戦線（TULF）、イーラム国民民主解放戦線（ENDLF）
タミル・イーラム解放の虎（LTTE）、タミル・イーラム解放機構（TELO）、
イーラム解放戦線（EPRLF）...

●タミル・ゲリラ主導への展開

1984年ごろから紛争の主役は過激なタミル・ゲリラに移る
1986年ＬＴＴＥが他の過激派集団を一掃しジャフナ半島掌握

●インド・スリランカ和平協定

1987年7月ジャヤワルダナーラジーヴ・ガンディー協定
インド平和軍（IPKF）を、タミル・ゲリラ掃討のためスリランカに派遣
1990年、プレマダーサ大統領が、平和軍撤退を要請、派遣は失敗に終わる

●チャンドリカ・クマーラトゥンガ大統領の平和協定案

1998年ータミル人自治を大幅に認める←国内問題としては解決不能
2000年ーチャンドリカへの爆弾テロ事件

結．宗教の時代としての21世紀

●つくられる宗教=民族意識とプロテスタント的「宗教改革」

ネオ・ヒンドゥイズムーヴェーダに還れ
アーリヤ・サマージ、ラーマクリシュナ・ミッション...
プロテスタント仏教ー佛陀ー佛
呪術の排斥、仏教の一元化・仏教への一元化、出家の規律→在家の規律

●宗教の内面化、対立の全面化

宗教の内面化→生存を宗教が提供する世界観に全面的に依拠すること
知識の大衆化→出家から在家への転換、宗教の全面化・民族化
外国の手が国内をかく乱←紛争を必要とする国際経済

●宗教に内在する暴力性?（竹内芳郎『意味への渇き』筑摩書房）

暴力化する少数者意識←自己の存在を賭けた闘争?

資料①

カナダ郵政,スリランカ反政府運動家のPスタンプを拒否

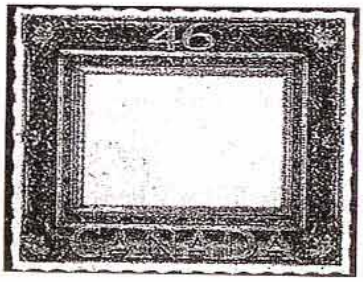
カナダ郵政が、スリランカの反政府ゲリラ指導者の「Pスタンプ」（肖像入りタブ付きの切手）の作成を拒否していたことが、米リンズ紙9月25日号で報告された。

Pスタンプを依頼したのは、タミル人過激派の最大組織「タミル・イラーム解放の虎」（LTTE）の指導者、ベルピライ・プラバカラン議長。

カナダ郵政によると、今年8月に依頼を受けたが,送られてきたプラバカラン氏の肖像が、写真ではなく印刷物からの切抜きだったため、作成を拒否したという。Pスタンプは作成にあたり、「画像の権利は本人に帰属していなければならない」という規約があり、印刷物ではこの規約に適さない。

同組織は,アメリカ政府はテロリスト集団としているが、カナダにはタミル人が多く移住しているためか、政府もテロリストに指定していない。

記事では、Pスタンプが政治宣伝に利用される可能性を示唆しており、各国の今後の対応が注目される。



◀額縁を象るカナダのPスタンプ。白地の部分に写真が入れられる。左はPスタンプの作成を断られたベルピライ・プラバカラン議長（スリランカの反政府組織指導者）。

郵趣☆2000年12月より

資料②

[講談社1985]

インドの宗教別人口

	1961年		1971年		1981年		1991年	
	百万人	%	百万人	%	百万人	%	百万人	%
ヒンドゥー教	366.5	83.5	453.4	82.7	549.7	82.6	672.6	82.4
イスラム教	46.9	10.7	61.4	11.2	75.6	11.4	95.2	11.7
キリスト教	10.7	2.4	14.2	2.6	16.2	2.4	18.9	2.3
シク教	7.8	1.8	10.4	1.9	13.1	2.0	16.3	2.0
仏教	3.2	0.7	3.9	0.7	4.7	0.7	6.3	0.8
ジャイナ教	2.0	0.5	2.6	0.5	3.2	0.5	3.4	0.4
その他	1.6	0.4	2.2	0.4	2.8	0.4	3.5	0.4
計	439.2	100.0	548.2	100.0	665.3	100.0	812.3	100.0

スリランカの民族別人口

	1981年	
	万人	%
シンハラ	1098.0	74.0
タミル	270.6	18.2
ムスリム	104.7	12.7
バーガー・ユーラシアン	3.9	5.5
その他	7.5	7.1
計	1484.7	100.0

スリランカの宗教別人口

	1981年	
	万人	%
仏教	1028.8	69.3
ヒンドゥー教	229.8	15.5
イスラーム教	112.2	7.6
キリスト教	113.1	7.6
その他	0.8	0.1
計	1484.7	100.0

共同体と社縁文化の未来

中牧　弘允

1990年代を「失われた10年」と形容するむきもあるけれど、それはバブル経済がはじけ倒産、不況、リストラに見まわれた側面にのみ目を向けた、せまい見方である。この間、おおいに業績をのばした企業もあれば、行政改革や政界再編の動きも加速した。100年を単位で見ると、日本は20世紀の前半は軍事国家として、後半は経済大国をめざして突き進んできた。しかし、軍人国家は解体し、企業戦士は解雇され路頭にまよいはじめている。

21世紀の日本はどこを向いているのだろう。あるいは、どこに向かっているのだろう。そうしたことを過去にさかのぼってかんがえるためには、10年のような短いタイムスパンではなく、せめて50年、100年の動向をみきわめる必要があろう。民博の特別研究「20世紀における諸民族文化の伝統と変容」はそうした問題設定にもとづいて企画され、わたくしは「共同体の20世紀」というシンポジウムを担当した。その際、共同体とは何らかの「共有」の意識にささえられ、人びとを物質的にも精神的にも束ねる社会集団であると規定して、20世紀の日本は以下のような3段階にまとめられるのではないかと提起した。

表1　20世紀の日本の共同体

1	地縁	地域	地主	神社祭祀	地租・固定資産税	領土国家
2	社縁	会社	サラリーマン	会社祭祀	所得税・法人税	会社国家
3	消費縁	市場	消費者	消費宗教	消費税	消費国家
	V縁	VC	利用者	V宗教	利用税	V国家

V　：virtual
VC：virtual community

ここではいわゆる血縁をとりあげていないが、イエがほとんど核家族にとってかわられたことは明白である。地縁のムラはかろうじて命脈を保っているが、いっぽう会社が都市を中心にめざましい発展をとげた。それを視野に「社縁」という概念が米山俊直氏によってつくられ、ほんらい結社縁の意味で造語されたにもかかわらず、もっぱら会社縁をさすほどになった。しかし、この会社縁もバブル崩壊でたよれる共同体としての地位をおびやかされている。

このムラと会社と国家が、「護送船団方式」とか「55年体制」といわれる経済優先の国家システムのなかで、もっぱら共同体の機能をはたしてきた。しかし、それが過渡期にきていることはもはやうたがう余地がない。ムラは農産物のグローバル化の波にのまれたらひとたまりもないであろうし、会社は生き残りを賭けたサバイバル・レースを展開している。国家といえども官僚主導の経済優先政策が破綻をきたしはじめていることは、それ自体の問題もさりながら、地方自治体の首長の意欲的な改革に端的にあらわれている。

ところで、共同体と社縁の結節点に位置する人間類型も20世紀なかばを境に家長からサラリーマンへとおおきくシフトした。そのサラリーマンの人生観・世界観において現在はどのように見えているのだろうか。そこに未来への予兆はないだろうか。そうした点を、ユーモアとペーソスに満ちた川柳にさぐってみたい。

■サラリーマン川柳傑作選

イ） ああ結婚社内旅行が運のつき　＜早射ちマック＞（Ⅰ－125）
ロ） 上役の娘をねらえ下級武士　＜玉勇丸＞（Ⅰ－51）
ハ） 棒グラフ伸ばしてくれた子の寝顔　＜幸夫＞（Ⅰ－14）
ニ） 親の希望（ゆめ）つぎつぎ消して子は育つ　＜月峯＞（Ⅰ－23）
ホ） 父帰る娘出かける妻眠る　＜欠く家族＞（Ⅴ－20）
ヘ） わが家では子供ポケモンパパノケモン　＜万年若様＞（Ⅷ－22）

ト） 見ず言わず聞かず目立たず働かず　＜三猿＞（Ⅲ－164）
チ） 昇進の椅子しか見えぬ妻の視野　＜悟柳＞（Ⅱ－43）
リ） 運動会抜くなその子は課長の子　＜ピーマン＞（Ⅰ－22）
ヌ） 部下思い涙もろくて補佐どまり　＜浅川和多留＞（Ⅰ－142）
ル） 無礼講会社にもどれば無礼者　＜逆玉男君＞（Ⅰ－20）
ヲ） 詫びと錆び身につく頃が定年時　＜中古車＞（Ⅶ－11）
ワ） 定年も間近か近所と仲良くし　＜根本ヤス子＞（Ⅱ－70）
カ） 定年後帰宅時間を妻に聞く　＜立場逆転の夫＞（Ⅰ－15）
ヨ） 定年の夫にエプロンプレゼント　＜トシエ＞（Ⅲ－57）

タ） 親会社不況になると別会社　＜愛妻くん＞（Ⅳ－156）
レ） 職安で昨日の友は今日の敵　＜職さがしの前部長＞（Ⅳ－133）
ソ） 社員数昔は自慢今負担　＜笑面桜師＞（Ⅷ－112）

ツ） 老眼鏡かけてパソコン見えぬふり　＜出きない人＞（Ⅶ－70）
ネ） 「てなかんじ～」どうでもいいが漢字かけ　＜私は先生＞（Ⅶ－104）
ナ） ウソだろうマナー研修受講済　＜貞やん＞（Ⅶ－114）
ラ） 国際化超えて我が部下宇宙人　＜課長補佐待遇＞（Ⅵ－89）

ム） 国のため昔働け今休め　＜越智洋四門＞（Ⅱ－38）

ウ） 墓だけは別にしてネと妻がいい　＜ハナタレ小僧＞（Ⅱ－80）
ヰ） 墓買うが部屋はあなたと別にする　＜林一見＞（Ⅴ－163）
ノ） 墓ぐらいせめて庭つき一戸建　＜ぽけまん＞（Ⅱ－52）